

2024 年 4 月の総評に代えて 高橋修宏

つま先が触れる まちりこ（埼玉県）
あなたは
海だから
凧いでばかりで目を覚さない

ここで、「あなた」と呼びかける対象は海——。「つま先」という細やかな身体的な触れあいを通して、人と「海」との交感が穏やかで親密な気配の中で描かれている。

さんずいの さいう（石川県）
ように
途切れたちんもくへ
きみは母音のといきをもらす

何より「さんずいの／ように」という直喩に驚かされた。なるほど、「さんずい」は三つの要素からなるが、その一つひとつは「途切れ」ている。そのことに「ちんもく」を感じる作者の微細なものへの眼差しは、三行目の「母音のといき」まで貫かれているようだ。

内臓を増やしてお待ちしています 松下誠一（東京都）

まず「内臓」という言葉から、昨今の臓器をめぐる交換や売買のイメージまで連想させられた。このようなイメージを踏まえると、「お待ちしております」の一言から徒ならぬアイロニーが手渡されるようである。

鏡台 散らかる 氷丸（茨城県）
I MY ME MINE

言うまでもなく「I MY ME MINE」はI＝私の活用形。まず「鏡台」が配されることで、どこか迷い混乱した私、さらに複数化した私を示唆しているのだろうか。

迫り来る飛行機の喉松林

奎いう子（佐賀県）

「喉」の一語によって、「飛行機」が無機的な事物から生命を持つイメージへと転換している。「松林」との取り合わせも効果的。やはり、この「飛行機」は旅客機よりも、戦闘機などのイメージがふさわしい。

旅客機として朧夜をやり過ごす

Azusa（京都府）

一方、こちらは「旅客機」と明示された一句。「朧夜」という伝統的な春の季語が、空の上からの視線によって「やり過ごす」されているのか。

ポスターの裏に

うたた（岡山県）

誰かがいるような気がして
めくらずにおいておく

「ポスター」の多くは、何らかメッセージを届けるもの。企業であれ公共機関であれ、その背後にはメッセージを届けようとする存在がある。「めくらずにおいておく」という表現が、そのポスターの背後にある存在に対して、ときに、そっと逆なでするような身振りにも感じる。

比較的歩きたくない千歳飴

太代祐一（神奈川県）

「千歳飴」と言えば、七五三の行事に付き物なお菓子。そんな「千歳飴」を下げた子ども、歩きたくないとぐずっているのだろうか。「比較的」というクールな措辞が、子どもの滑稽さを引き立てる。

夜桜に少女の声で呼ばれ、見る
帰り道がわからなくなる

高松瞳（東京都）

これまでも、坂口安吾であれ、梶井基次郎であれ、桜という存在の背後には霊的な気配や不思議な怪しさが描かれてきた。やはり、この作品も、そんな延長線上にあることは確かだ。「少女の声」や「帰り道がわからなくなる」が効いている。

おかえりの狼煙を上げて光る米

中村航太（福岡県）

もしや、帰郷のシーンなのだろうか。それにしても、「米」という小さな存在が、ある生々しさ、激しさを伴った生命体のように描かれている。「光」と「米」という文字形象の相似性も効果的だ。

命って形で揺れる干した烏賊

小里京子（北海道）

たしかに「干した烏賊」は、「命」という文字の形に似ている。また、「揺れる」の一語によって、「干した烏賊」が生々しく現前＝プレゼンスするようだ。

夜桜がポップコーンに見えている

浪花小慎（東京都）

何よりも、「夜桜」を「ポップコーン」というキッチュなものに見立てることが新鮮。これまでの「夜桜」のイメージを脱臼させるような表現が面白い。

待っている人も待たれている人も
いない待合室の空き缶

折原（神奈川県）

かつて田舎の無人駅で、こんな光景に出会ったことがある。だれもいない「待合室の空
缶」が、ただ人の気配、あるいは影のように置かれていた。この作品では「待」と言葉が
三回反復されることで、待つ／待たれるという時間をめぐる不思議ささえも感じさせる。